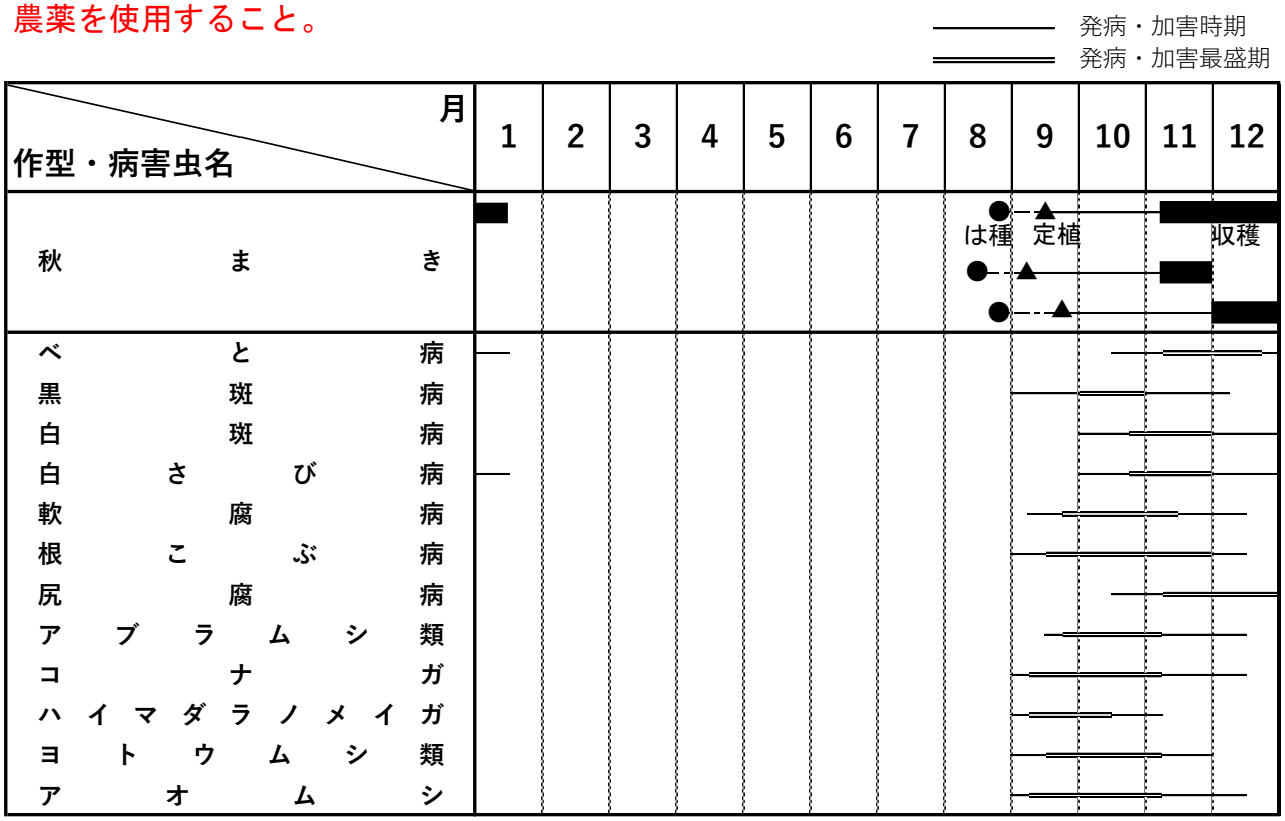
はくさい

農薬取締法上、「はくさい」と「非結球はくさい」は別の作物である。
はくさいには、「はくさい」「結球あぶらな科葉菜類」「葉菜類」「野菜類」に適用のある農薬を使用すること。



べと病

留意事項

1 晩秋と春の低温、多雨時に発生が多い。
2 アミスター20フロアブルは、薬害のおそれがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。高温条件下では、結球前に散布すると薬害が生じるので使用しない。
3 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 排水を良好にする。
2 密植を避ける。
3 肥効切れ、チッソ質肥料の過用を避ける。
4 被害株は、ほ場外へ持ち出し処分する。
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞【1000倍　7日／2回】
・ランマンフロアブル ＜２１＞【2000倍　3日／4回】
・ピシロックフロアブル ＜Ｕ１７＞【1000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アミスター20フロアブル ≪１１≫【2000倍　前日／4回】
・ゾーベックエンテクタSE ＜２１＞ ＜４９＞【3000倍　7日／2回】

黒斑病・白斑病

留意事項

1 予防的防除に重点をおく。
2 晩秋から初冬にかけて雨の多い年に発生が多い。
3 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
4 ダコニール1000、ダコニールアルファの成分TPNの総使用回数は3回以内（但し、は種または定植前の土壌混和は1回以内、散布は2回以内）なので注意する。

防除方法

1 肥効切れしないように、肥培管理に注意する。
2 被害葉は、早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
3 排水を良好にする。
4 なるべく連作を避ける。
5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞【1000倍　7日／2回】
・ダコニール1000 ＜Ｍ５＞【1000倍　7日／2回】
・ダコニールアルファ ＜Ｍ５＞【2000倍　7日／2回】
6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・パレード20フロアブル ≪７≫【2000～4000倍　前日／3回】
・ロブラール水和剤 ＜２＞【1000～1500倍　14日／3回】

白さび病

留意事項

1 アミスター20フロアブルは、薬害のおそれがあるため、浸透性を高める展着剤を加用しない。高温条件下では、結球前に散布すると薬害が生じるので使用しない。
2 QoI剤≪１１≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
3 プロポーズ顆粒水和剤、ジャストフィットフロアブルの成分ベンチアバリカルブイソプロピルの総使用回数は3回以内。

防除方法

1 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・プロポーズ顆粒水和剤 ＜Ｍ５＞ ＜４０＞【1000倍　7日／2回】
・ライメイフロアブル ＜２１＞【2000～4000倍　7日／4回】
・ピシロックフロアブル ＜Ｕ１７＞【1000倍　前日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

2 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アミスター20フロアブル ≪１１≫【2000倍　前日／4回】
・ジャストフィットフロアブル ＜４３＞ ＜４０＞【5000倍　7日／3回】
・メジャーフロアブル ≪１１≫【2000倍　3日／3回】

軟腐病

留意事項

1 薬剤は株の地際部にも十分散布する。
2 害虫の加害傷口から病原菌が侵入することが多い。
3 秋期温暖の年に発生が多い。
4 土壌pHが中性（pH6～7）で発生しやすい。
5 アグリマイシン-100は、薬害のおそれがあるため、高温期または幼苗期に使用しない。
6 だいこん、かぶ、にんじん、ねぎ、トマト、ばれいしょなども侵す。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 過度の早植えは避ける。
3 排水を良好にする。
4 キスジノミハムシ、ハイマダラノメイガ、ヨトウムシ、アオムシなどの防除を徹底する。
5 被害株は、早めにほ場外へ持ち出し処分する。
6 は種または定植時に、下記の薬剤を施用する。
・オリゼメート粒剤 ＜Ｐ２＞
【6～9kg／10a　全面土壌混和　は種時または定植時／1回】
7 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
・キノンドー水和剤40 ＜Ｍ１＞【800倍　30日／5回】
・マスタピース水和剤 ＜－(生)＞【1000～2000倍　前日／－】
8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アグリマイシン-100 ＜４１＞ ＜２５＞【1500～3000倍　14日／3回】
・バリダシン液剤5 ＜Ｕ１８＞【500倍　3日／3回】
・スターナ水和剤 ＜３１＞【1000倍　7日／3回】

根こぶ病

留意事項

1 薬剤は土壌とよく混和する。
2 酸性で排水不良のほ場に発生が多い。

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 石灰質肥料を施用して、土壌酸度をpH6.5～7.2に矯正する。
3 排水を良くし、過湿を避ける。
4 有機質資材を施用し、土づくりに努める。
5 秋まきの場合は、早まきを避ける。
6 は種または定植前に、下記の薬剤を施用する。

・ネビリュウ ＜３６＞
【20～30kg／10a　全面土壌混和　は種または定植前／1回】または
【20kg／10a　作条土壌混和　定植前／1回】

・フロンサイド粉剤 ＜２９＞
【30～40kg／10a　全面土壌混和　は種または定植前／1回】または
【15～20kg／10a　作条土壌混和　は種または定植前／1回】

・ランマンフロアブル ＜２１＞
【500倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱、またはペーパーポット1冊（30×60cm、使用土壌約2.5～7L）当たり2L）　定植前日～当日／1回】
【2000倍　株元かん注（250ml／株）　14日／1回】

尻腐病

留意事項

1 11月以降、収穫まぎわに発生が多い。
2 SDHI剤≪７≫は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

防除方法

1 あぶらな科野菜の連作を避ける。
2 石灰質肥料を施用して、土壌酸度を矯正する。
3 未熟な有機質資材の投入は控える。
4 収穫後、被害葉はほ場外へ持ち出し処分する。
5 発病の恐れのあるほ場では、下記の薬剤で土壌消毒を行う。（ⅩⅢ土壌消毒　参照）

・バスアミド微粒剤、ガスタード微粒剤 劇 ＜－＞【20～30kg／10a
所定量を均一に散布して土壌と混和する　は種または定植21日前／1回】

6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・アフェットフロアブル ≪７≫【2000倍　前日／3回】
・ネクスターフロアブル ≪７≫【1000倍　7日／3回】
・リゾレックス水和剤 ＜１４＞【1000倍　14日／3回】

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

ーはくさいー

ウイルスによる症状

防除方法

1 発病株は速やかに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
2 アブラムシ類の防除に努める。（アブラムシ類の項　参照）

アブラムシ類

留意事項

1 苗床は寒冷しゃで被覆して、アブラムシ類の飛来を防ぐ。

防除方法

1 下記の薬剤を、育苗期に処理する。
・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】
2 定植時に下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞【2g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】
3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
・アディオン乳剤 ＜３Ａ＞【2000倍　7日／5回】
・コルト顆粒水和剤 ＜９Ｂ＞【4000倍　3日／3回】
・トランスフォームフロアブル ＜４Ｃ＞【2000倍　3日／3回】

コナガ

留意事項

1 薬剤抵抗性が生じやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
2 幼虫による被害が著しいのは春と秋である。
3 あぶらな科野菜を加害するほかナズナ、イヌガラシ、スカシタゴボウなどのあぶらな科雑草にも寄生する。
4 セル成型苗では、定植前に薬剤をかん注処理すると省力的に防除できる。
5 コテツフロアブルは、薬害のおそれがあるため、8葉期以降に使用する。

防除方法

1 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。
・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　育苗期後半～定植当日／1回】
2 定植時に下記の薬剤を施用する。
・スタークル粒剤、アルバリン粒剤 ＜４Ａ＞

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【2～3g／株　植穴土壌混和　定植時／1回】

3 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　7日／3回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・ヨーバルフロアブル ＜２８＞【2500～5000倍　前日／3回】
・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

ハイマダラノメイガ（ダイコンシンクイ）

留意事項

1 だいこん等あぶらな科作物を加害する。
2 7～10月が高温少雨の年に多発する傾向がある。
3 食入前の防除に努める。

防除方法

1 育苗中の苗は寒冷しゃ等で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
2 定植には健全苗を使用し、本ぽへの幼虫の持ち込みを防ぐ。
3 下記の薬剤を、セル成型育苗トレイ（培土）に処理する。

・ベリマークSC ＜２８＞
【400倍　かん注（セル成型育苗トレイ1箱またはペーパーポット1冊（約30×60cm、使用土壌約1.5～4L）当たり0.5L）　は種覆土後～定植当日／1回】

4 発生を認めたら下記の薬剤を芯葉までかかるよう丁寧に散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】
・ディアナSC ＜５＞【2500～5000倍　前日／2回】
・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞【1000倍　前日／3回】
・ハチハチ乳剤 劇 ＜２１Ａ＞【1000～2000倍　14日／2回】

ヨトウムシ類

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　ハスモンヨトウ・ヨトウムシ・シロイチモジヨトウ　2000～3000倍　7日／2回】
・アファーム乳剤 ＜６＞【ヨトウムシ　1000～2000倍　7日／3回】
・ディアナSC ＜５＞【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ　2500～5000倍　前日／2回】
・ベネビアOD ＜２８＞
【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ・シロイチモジヨトウ　2000～4000倍　前日／3回】
・アクセルフロアブル ＜２２Ｂ＞

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。
注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【ハスモンヨトウ・ヨトウムシ　1000～2000倍　前日／3回】

・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

アオムシ

防除方法

1 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。

・モスピラン顆粒水溶剤 劇 ＜４Ａ＞【1000～2000倍　14日／3回】

・グレーシア乳剤 ＜３０＞【結球あぶらな科葉菜類　2000～3000倍　7日／2回】

・アファーム乳剤 ＜６＞【1000～2000倍　7日／3回】

・ベネビアOD ＜２８＞【2000～4000倍　前日／3回】

・ＢＴ剤 ＜１１Ａ＞（Ⅸ野菜類の病害虫防除　3野菜類　参照）

注１：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注２：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。